

ベルグソンの哲学における知性の機能について

— 知 性 と 行 動 —

西 谷 敬

人間精神の特色をなすのは、知性である。ベルグソンは、認識論において知性を行動とのつながりで考え、更に知性の働きを物質の世界に限定して考えようとした。しかし知性はそこに制限されることによって、かえって物質の世界をこえる可能性を開いた。知性によって精神の世界が開かれた。ベルグソンは、知性を媒介にして自己自身に戻ることの可能性を主張した。ベルグソンにとっても、他の哲学者と同じように、自己自身を知ることが、最も必要且つ重要なことであつた。そしてベルグソンは経験の中でとり出された真の自己をもとにして形而上学をたてようとした。形而上学の出発点をここにとつたと云う点で、ベルグソンは、プロチンと立場を同じくする。^{註1} さてベルグソンの形而上学は、それは普通生の哲学と云われているが、生命を直接認識する直観に基づく経験的形而上学と呼ぶことが出来る。直観と知性とは対象がちがひ、働き方が異なる。形而上学において知性の発生の場にもどることによって、知性と直観の関係が明らかになり、知性が直観と結びついて働く可能性が開かれる。又形而上学の立場から、知性の働きを知性の生成から考えて行くと云うことになる。そしてベルグソンは知性の作り出した枠を経験の中で打ちこわし知性の働きを拡大しようとしている。知性の働きをめぐるこれらの問題を、行動との関わりの中で、これから論じ

てゆくことにしたい。

知性は、人間の認識能力を代表するように、古代以来考えられて来た。知性は自発的な能力であり、概念をもって認識を構成すると云う訳である。しかしベルグソンは、これに反対し、「人間知性は、行動の必要に依存している」と考え、更に「行動をおけば、そこから知性の形式そのものが導き出される」(E. C. 153 : 624)^{註2}と主張する。ベルグソンは、特にカントを意識していたように見える。カントのように認識が一切知性の働きに依存するとした場合、例えば「統一する」と云うような知性の働きは、他のようでもあり得たとすることも出来るから、知性のもたらす認識は相対的なものになってしまう。このようにベルグソンはカントを批判している。ベルグソンの認識論においては、知性の働きがどのような生れて来るかと云うことが問題であった。更にベルグソンは、知性の働きが「我々の身体が周囲の物体に及ぼす行動を指導することである」(P. M. 34~35 : 1276)と述べて、知性の働きと行動とが密接に結びついていることを主張している。その際行動は、身体を通じて外界に働きかけることとして理解されている。行動をこのように考えるのは、「物質と記憶」(一八九六)において、特にその第一章で展開されたイマジニに基いている。ベルグソンは、物体をイマジニ image^{註3}として、そして世界をイマジニの集合としてとらえようとした。イマジニはそれ自体で存在するものであるが、感覚を開けば知覚され、又感覚を閉じれば知覚されないものである。イマジニは、實在論者の云う「事物」と観念論者の云う「表象」の中間にあるものとして、両方の性質をもっている。(M. M. 1 : 161) さて世界の中でそれらのイマジニは、相互に影響し合っている。それらのイマジニの中で、作用と反作用の中心をなして、それを中心として無数のイマジニが排列されているのが、自己の身体である。それで身体は、他のイマジニに働きかける行動の中心である。身体を中心に排列されたイマジニは、自己の可能な行動の総体を示している。さて身体の行なう可能的行動をあらわすのが知覚である。知覚は、一

般に信じられているように物を認識するためでなく、物に働きかけるために生じたのである。そして知覚は、「身体の働きかけの可能性の尺度をあらわしている。」(M. M. 199 : 316) 我々にあらわれるのは、世界全体の中から身体を中心にして切りとられた断片である。このようにベルグソンは、知覚の行動との関わり即ち知覚の実践的、功利的性格を強調する。しかし知覚は行動そのものではない。実際に行動が行なわれている時、我々は自分の内に感情をもつであろうが、知覚はそれ自体としてあらわれない。むしろ行動が差し止められたり、これから行動しようとする時に、知覚がはっきりとあらわれてくる。こうして知覚は、行動を説明し、準備する。このために、知覚としてのイマージュをおぎない解釈するものとして、記憶の中に貯えられたイマージュが知覚と結びつく。観念を媒介として知覚と記憶のイマージュを結びつけるのが知性の仕事である。この意味で知性は行動を説明し、準備するものである。そして知性は知覚の延長であると考えることが出来る。

ベルグソンにとって知性の働きがどうして生じて来るかが問題であった。知性の働きは行動の必要に基づいている。そして先に述べたように行動によって我々は周囲の物体に働きかけている。ベルグソンによれば、一般に生命は「なまの物質に働きかけて何か得ようとする努力」(E. C. 137 : 611. cf. P. M. 34 : 1278) である。それで知性の働きが行動の必要に依存しているのは、生命そのものの必要に基づいているからである。「精神の行為と状態と能力の迷宮において決して手離してはならない糸は生物学の与える糸である。生きることが第一であるから。」(P. M. 54 : 1294 ~ 95) そこでベルグソンの認識論は生物学と云う導きの糸によって展開されることになる。生命が物質に働きかけると云う時、動物では、本能と知性と云う二つの働きかけ方がある。知性の働きがどのようなものであるかを知るために、本能と比較してみることが便利である。ベルグソンによれば、本能は、昆虫類とくに膜翅類において最もよく発達している。本能によって昆虫が、不思議と思われ位、適確に行動することは、ファールルの「昆虫記」などによってよく知られている。例えば餌食を襲う昆虫は、その餌食を殺しては困るので、これを麻痺させようとする。こ

の際その餌食となる動物（昆虫）の神経中枢をそれぞれの動物の違いに応じて、まるですぐれた昆虫学者のように、適確に刺すのである。昆虫学者は、その餌食となる動物（昆虫）の行動や構造を知るためには、それを観察し、解剖し、更に実験したりして、一つ一つの事柄を確認していかなければならない。つまり彼は、外から見たり、働きかけたりすることによって、その動物を知ることが出来るのである。しかしその昆虫が餌食を刺す際に、それを昆虫学者のようにして知っていたとは考えられない。所が昆虫とその餌食の間に共感があり、昆虫は内面から餌食の傷つけ方を知っていたのだとすると、昆虫の行動は理解出来るものになる。「本能は共感である。」（E. C. 177 : 645）又本能は自然即ち生命の働きに密着しているので、本能の働きがどこで始まり、自然の活動がどこで終るのか誰にも言えない。「大部分の本能は有機化 *organisation* の仕事そのものの延長、或いはむしろその仕上げである。」（E. C. 140 : 613）だから本能は、身体と云う有機的な道具を組立て、利用する。そして本能には、自分の身体について或は又身体の向う対象について、内側からの、生得的な認識がある。しかし本能は考えない。そこで行動の中に閉じこめられて、無意識の状態に止まることになる。

身体と云う有機的道具を組立て利用する本能に対して、知性は「無機的道具を製作し、使用する能力である、」（E. C. 141 : 614）と定義される。知性の働きを理解するために、無機的道具がどのような働き方をするのかを見なければならぬ。無機的道具は、働きかける対象のどれにもびったりと合わない代りに何に対しても用いられ、又どのようにも使われ得る。例えば同じ一つの包丁で、肉でも、紙でも、木でも切ることが出来る。又それでもって切るだけではなく、たたいたり、突き刺したり、削ったりすることが出来る。それで一つの道具があると、その使い道は一つに限られないで、かえってこれを使う者に逆に働きかけて新しい機能を生み出すことがある。そしてこの新しい機能のために、新しい道具が発明されると云う事が起こる。そのように道具の使用によって、人間が自然に働きかける力は、どんどんひろがっていった。又道具の使用が更に新らしい道具の使用を呼んだように、道具の製作の場合

にも、道具を作る必要から、道具を作るための道具を製作すると云うことになり、限りなく進んでいく。知性が、無機的な道具をもって物質に働きかけると云うことは、外から物質に働きかけると云うことである。外から物質に働きかけるために、知性は働きかけるための手段、それは人工的であって従ってもともと不完全なものであったが、その手段即ち無機的な道具を変化させ、改善させていったのである。この無機的な道具でもって、知性は、主として無機的な物質、特に固体を取扱う。知性の用いる道具は、固体に対して最も良く働きかけることが出来るからである。無機的な物質特に固体の特色は、空間的拡がりをもつことである。そこでは一つのものは他のものの外に立つと云う関係にある。物質に対して知性が働きかけようとする時、知性はそれを自分の好きなように解体し、構成し直すことが出来るものと考えている。ベルグソンは、このことを「製作」*fabrication* (E. C. 157 : 627) と呼んでいる。製作と云うのは本来道具の製作のことを云うのであるが、ベルグソンは、ものがある時に、それを要素に分解(分析)し、これらの総合(組合せ)をすると云う操作を一般に製作と呼ぶのである。ものを好きなように分解し、組立てると云う表象は、等質で空虚であって、又無限に拡がると共に、又無限に分割出来る媒体に対応する。このような媒体は、我々が事物に働きかける際の行動の図式であって、このような行動の図式が空間である。ベルグソンは、このように空間を主観的なものと考えたのであるが、同じように空間の主観性を論じたカントが直観の形式としたのに対して、空間を知性の作りあげた行動の図式として考えようとしている。「空間は、人間知性の製作の傾向を象徴する表象である。」(E. C. 158 : 628) 製作的な知性は、空間表象をもつだけでなく、言語を持っている。ベルグソンによれば、人間の言葉の符号としての特色は、「一般性よりむしろ可動性にある。」(E. C. 159 : 629) 言葉は、一つの対象から他の対象へと移ることが容易に出来る。ベルグソンは、符号としての言葉の可動性を二つの面から考えている。①言葉は、ある知覚された対象から他の知覚された対象へ拡がる。②又言葉は、知覚されたものからその記憶へ、更に表象された逃げゆくイメージへ、それからこのイメージを表象することの表象即ち観念へと拡がる。この第二の可動性によって

言葉はものから觀念に行く。言葉は外物として考えられるが、それを手掛りにして内面的世界が、知性の行なう操作が明らかにになる。そして言語を通じて意識があらわれる。ここで知性の働きが逆説的な意味をもつことに我々は気づく。製作的知性は外から物質に働きかけるために、人工的な道具、一つには無機物的道具を、他方では言葉を発展させた。それによって外に向って働きかけると云う知性の働きが、逆に内面的な世界を開くことになったのである。

知性によって、しかも知性によってだけ、内面的な世界即ち意識があらわれることが可能になった。目の前の状況にしばらくつけられている動物や、自動的習慣的行為においては、行動は一つしか可能でない。その場合意識は行動と密着し、行動をしかける瞬間にあらわれそうになっても、行動の遂行によって意識は栓をされてしまっている。しかし行動が妨げられたり、いくつかの行動の中から選択しなければならなくなると、意識は行動から解放されて目覚める。行動に密着しないで、行動を選択したり、組立てたりするのが知性である。知性は、行動から離れて、行動を解明し、準備する。そこで「意識は人間において、しかも人間においてのみ、自己を解放するのである。」(E. C. 264: 719) やつて解放された意識はどのようにあらわれるのだろうか。ベルグソンは犬と人間とが同じ光景を見た場合を例にとって説明している。その場合知覚が同じであれば、その記憶は多分同じように両者の脳を変様させるだろう。しかし記憶は、人間の意識と犬の意識とは全く別のものになるはずである。犬の場合記憶は知覚にしばらくつけられ、同じような知覚があらわれた場合にだけ、その記憶はよみがえるであろう。所が人間においては、現在の知覚と無関係に記憶を呼びおこすことが出来る。いつでも自由に人間は過去を思い出し、夢みる事が出来るのである。(E. C. 181: 684) そこにまずこのように知覚従って行動と独立に、夢想が可能であると云う点において意識の解放が考えられている。知覚している限り、我々の注意は特定のものに制限されている。しかし夢想におちいるにつれて、我々の注意は散漫となり、過去の世界に拡がっていく。そこで我々は、ものごとを量として測ることをやめて、質的多様の中でみる、そして「持続を感じる」(D. I. 94: 84)ベルグソンは我々の精神生活を行動の平面と夢想の平面の間をゆれ

動くこととして理解しようとしている。知覚や行動においては我々は外物に捉われて、自分自身に対して外的に生きているが、夢想によって我々は、「自分自身の中にひき戻される」(E. C. 91: 883) その場合の自己とは何であろうか。ベルグソンは、「夢」と云う講演(一九〇一)の中で、我々の過去の生活をどんなに細い点に至るまで完全に保存している記憶について述べている。それは我々が目覚めている時には、無意識の状態にある。しかし我々が眠りにおちこみ、我々の関心が現在の状況から離れると、全体としての記憶は、「半開きになつた扉」(E. S. 96: 886)に殺到して現われようとする。しかし、その中で、眠っている時の環境に適合する記憶のイメージが選択されて現われる。ベルグソンは、夢があらわれる過程についてこのように説明しているが、記憶のイメージの選択の仕組みは、目覚めている時の生活への注意の場合と同じである。ただ夢の場合、選択が現実の状況に厳密に適合しないと云う点で異なる。更にベルグソンは、プロチンを引用し、たとえでもって夢のメカニズムを説明しようとしている。(E. S. 96~97: 887~8) イデアの世界にある魂が、自分をひきつける身体に向つてつい落する。それによって生命が始つたのである。同様に記憶は、現在の状況(身体)に結びついてあらわれる。ベルグソンがここで言っていることと注意すべき点は魂と身体との結合あるいは記憶と現在の状況の結びつきと云うことよりも、むしろ魂或いは精神、或いは記憶の、物質からの独立存在と云うことである。記憶或いは意識は、物質(身体)から離れてあると、無力であつて、現在の世界には即ち現実には現われない全くの無意識の状態に止まる。更に夢又は夢想として意識があらわれてもぼんやりと浮遊する多くの記憶のイメージとしてしか現われない。従つてその際意識が、現実の世界に生き生きと働きかけることはない。精神或いは意識は、それ自身先に述べたように広大であるけれども、弛緩していて無力なものなのだろうか。ベルグソンは、この場合精神あるいは意識を記憶として扱っている。そして我々は直接的知覚によつてものを聞いたり、見たたりすると云うより、記憶が我々にも物を見させたり聞かせたりするのであると云っているが、今問題としている夢想の平面においては、記憶が知覚と結びついて現在に働きかけると云うことはな

いのである。むしろもとは外界の知覚によって得られたイマージュを、記憶は夢想において逃げ去りゆく記憶のイマージュとして我々に提供しているにすぎない。しかし「イマージュは常に事物である。」(M. M. 139: 269) 意識は、外界に働きかける行動から解放されたはずであるが、夢想において意識或いは精神そのものを我々はとらえることが出来ない。行動から解放された意識を夢想としてとらえようとすると、結局外界によって与えられたイマージュを記憶のイマージュに置換することになってしまふからである。意識のあり方をさがすためには、他の方法をとらなければならぬ。

さてベルグソンは、すでに述べたように、本能と知性の働きを対比して考えた。本能は身体と云う有機体を通して働くのに対して、知性は無機的道具をもって物質に働きかける。本能は共感であり、生命に密着しているので、有機化の延長として見られるのに対して、知性は、物質特に固体に対して外から働きかける即ち製作するものである。しかしこれはあくまで図式的な説明である。現実の個々の生物には、知性と本能が共にそなわっており、二つは互いに補ない合っている。人間の場合をとってみても、人間の精神は主として知性である。しかし人間に全然本能がないのかと云うと、乳のみ児などを見ても、そうは云えない。人間の精神において、知性を「明るい核」とすると、そのまわりにそれを補なう「曇り」*une nebulosité vague*, (E. C. IX, 178: 492, 645) がある。これが本能である。本能は生命に共感するのだから、本能による認識は生命そのものに接するが、それは取出されないで行動の中で実演されることにとどまる。そこで本能は行動の始りかけに現われそうになっても、行動の進行によって栓をされて、本能は無意識にとどまることになる。(E. C. 167: 637~38) 「本能が無意識に向うのに対して、知性はどちらかと云うと意識に向う。」(E. C. 145: 618) 知性によって、意識は行動から解放されることになった。解放された意識によって、今まで行動の中に閉じこめられていた本能が現われる可能性が出てくる。本能は生命に密着している。その生命とそれに結びつく相互浸透即ち持続をとらえるために「知性が自分に自然な方向を逆にし、身を自分に向けて換る」(E. C.

162 : 632) 必要がある。知性は本来物質に関わり、空間においてもものを考える。そして又内面の世界で観念をあやつる。しかし「観念は空間にある事物と同様、互いに他のものの外にある。」(E. C. 161 : 631) そこで観念を用いて考えると云うことは、空間の中で考えることと平行している。そこで両方共知性に自然な方向である。知性が自分自身に向けて身を振るとは、どう云うことであろうか。それは単に観念を用いて反省することではなく、知性がそこから出て来たものに帰ることのように思われる。そのことがどのようにして可能になるかを見るために、生命そのものの或いは持続がどこにおいて我々に現われてくるのかを見てみよう。それは、我々にとって最も身近な所に、自己自身の中に現われる。

自己自身について、ベルグソンは、表面的自己の下に根底的自己のあることについて次のように説明している。(P. M. 182 ~ 183 : 1386 ~ 97 cf. D. I. 93 : 83) 自己を働いていないものとして意識の内的な眼で眺めると、すぐに、外の物質的世界から来た知覚に気付く。これらの知覚は互いにはっきり区別され、一つのものは他のものの外にあると云うように、つまり空間の中で並んでいる。自己はその表面において外界に接している。又知覚に附随してそれらを説明しようとする記憶があるが、これらもお互いは区別されるものである。このような表面的自己においては我々は精神の拡散と弛緩の内であり、空間性の方向に向う。しかしこのような自己の表面にあるものから、精神の集中と緊張によって自己の内面にもっと入り込むと、全く異なった様子が現われてくる。そこでは一つ一つの要素が互いに区別されて並べられず、一つの連続した流れがあり、その一つ一つは先のを含みながら続くものを示していて(相互浸透)、渾然一体となって進んでいる。このような根底的な深い自己において、持続が現れてくる。「持続とは、過去が未来をかじって増大しながら進んでいく連続的な進展 *le progrès continu* である」(E. C. 4 : 498) として定義される。自己自身の内面に深く入れば入る程、持続従って連続的進展もはっきりしてくる。ベルグソンは、表面的自己と根底的自己を二つの対立するものとしなくて、精神の進んでいく二つの方向であると考えた。前者において

は精神の拡散と弛緩がみられ、空間性をめざして進む、それに対して後者においては集中と緊張がみられ、精神性の方向に進む。前者においてはくり返しが、後者においては、発展がある。

ベルグソンは、根底的自己の中にもぐっていくと更にあるような様子が現われてくると述べる。(E.C.201: 664~65)「自己の一番の深みにおいて、自分が自己に固有な生命の最も奥まった所にいると感じられる地点をさがしてみよう。すると我々は純粹持続に、即ち過去が絶対に新しい現在によって絶えず大きくなりながら前進する持続にもぐりこむ。しかしそれと同時に我々の意志のばねが、その極限まで緊張することを感じる。自己の人格をばげしく自己自身の中に収縮させることによって、我々はすり抜ける過去をまとめ、これを緊密で不可分なままにつき進めて、現在を創造させながら現在の中にはまりこまなければならない。しかし我々がそこまで自分をつかみなおす瞬間はめずらしい。その瞬間は、我々の本当に自由な行動と一つになっている。」内面的自己は、意志によって動かされていることがこれによって解る。又ベルグソンにおいては、持続と創造と自由とが密接に結びついていることが解る。自由な行動について考えてみよう。「我々の行動が自分の人格の全てから発する時、我々は自由である」。(D.I. 129. 130, 132: 113. 114. 116) 自由な行動を通して、我々は眞の自己自身と関わり、自己をあらわすことになる。古来自由について決定論者と非決定論者の対立がある。決定論者は、人間の行動は、全ての物理的自然的現象と同じように、先行する状況によって法則的に厳密に決定されている、と論じる。それに対して非決定論は、行動する者が望んだなら、いつまでもその行動とちがった行動を選び得ると論じる。しかしベルグソンは、両方共行動をすでに為されたものとして、空間の中で考えているとする。そして行動は必然的に決定されていたのであるとか、別の行動を選ぶことが出来たとか論ずる。そうすると結局決定論者が優位にたち、自由が否定されることになってしまう。行動をすでに為されたものとして空間の中で考えることをやめて、行動を出来上りつつあるものとして時間的進展の中で考えることによって、始めて自由な行動は可能である。持続と自由な行動は一つである。自由な行動を我々は、一つの事

実として認めなければならない。ベルグソンは、行動において自由は程度を許すと考えた。(D. I. 125: 109) それは我々の行なう行動が自己を完全にあらわし、自己と完全に一致すると云うことは殆んど不可能だからである。しかし人間は意志をどこまでも緊張させて、完全な自由に達しようと努力することは出来るはずである。このような努力をすることによって、人間は自己の内において、「相互浸透し不断に生成し創造する生命」に触れることになる。(E. C. 179: 646) 生命は世界の中を貫通しているものである。こうして自己の内面において、有限性から無限へと進むための通路が開かれた。ベルグソンの形而上学はこのようにして成立するのであるが、行動に関して今まで述べたことを振り返ってみよう。

自由な行動と共に、行動について先に見たのとはちがった考えがあらわれたのが解る。先に知性の働きが行動の必要に基づくと言った時、行動は外界に働きかけると云うことであつた。これは、身体と云うイメージとその外の空間に並んでいる他の多くのイメージの動的關係を意味する。そして行動が行なわれると、それに対する意識が失なわれがちであつて、行動がとぎれた時に意識があらわれた。それに対して自由な行動は、自己の全体をあらわすものであると考えられた。行動は、自己自身との内面的關係の中で考えられる。そして行動が自由になればなる程、意識は強烈になる。自由な行動においては意識は「出来上つたものから離れて、出来つつあるものにそっていかなければならない。見る能力が自分自身の方に身をよじて意志する行動ともはや一つにならなければならない」(E. C. 238: 666) このように行動と一つになった見る能力が「直観」である。直観は本能の發展したものであり、直観によって生命更には持続が直接に知られるのである。(E. C. 178: 645) 行動についての二つの見方は、このように意識の二つのあり方を示している。更にこれは持続に対する二つの見方につながる。持続は、ある場合には記憶として、行動の必要から解放された多様性としてあらわれる。すると夢想において真の持続があらわれることになる。しかし持続は過去の保持と共に現在において創造をし、常に予言出来ない新しさをもたらす^{註4}。この点では持続は意志の緊張の中にあら

われる。この点に関して、ベルグソンは次のように説明している。「我々が自分の行動を注視する時の、或いは自分を注視することが役に立つ時の持続は諸要素が互いに分解し、並列する持続である。しかし我々が行動する時の持続は、我々の諸状態が溶け合う時の持続であり、行動の内的本性を考える唯一の例外的場合即ち自由の理論においては我々は思考によってこのような持続に身を置くように努力しなければならない。」(M. M. 207 ~ 8 : 322—23) ベルグソンのこの区別即ち行動を見る立場と行動する立場の区別は、重要である。これによって先に見た行動や意識や持続に対する二つの対立した見方が出て来た理由が明らかになる。外界に働きかけると云う意味での行動において、行動そのものより行動の結果が問題である。行動の結果を予測するため、外界のイマージュと身体 of イマージュの關係を見ようとする。そのような關係において行動を見ると云うのが意識である。意識は行動に密着していないので、行動から解放される。解放された意識は記憶として夢想の中にあらわれる。又夢想においてある意味で眞の持続があらわれるとも云える。しかし行動から離れた夢想は、外界のイマージュを記憶のイマージュに置き換えるに過ぎない。そして行動においても夢想においてもイマージュの分解と並列が見られる。このような行動を見る立場に対して、行動する立場においては、行動と意識が一緒になり、行動は持続の中で即ち連続的進展の中で直観される。知性は云うまでもなく、行動を見る立場に立つ。知性は行動を説明し準備するが、それを通じて意識を行動から解放する。そして「意識は、いったん解放されると、自分の中に折れかえて自分の中に眠っている直観の潜在力を目覚めさせることが出来る。」(E. C. 183 : 650) とベルグソンは論じる。知性を補なう直観はこうして現われる。そしてこの直観によって行動そのものをとらえることが出来る。知性を媒介にして直観があらわれたと云うことは、知性は行動を見る立場から行動する立場への媒介をすると言ふことである。知性は認識論的には、このような意味をもってゐる。認識論は知性を出発点とする。しかしよく考えてみると、知性からどのようにして直観に移れるのかは全く不明である。ベルグソンは先に知性が自分に自然な方向から逆に自分に向けて身を振る必要があると云ったが、知性に

よってどうして可能なのか、はっきりしない。むしろ知性の働きを「否定」した所に直観があらわれる。しかしこの「否定」は直観の能力である。(P. M. 120 : 1347~48) 知性と直観を対比して知ること出来る。しかし知性を通じて直観があらわれたはずであるのに、知性から直観への移り行きが説明出来ないのは認識論そのものの問題を示していないだろうか。行動を見る立場から行動する立場へと云うことについて考えたのであるが、逆の場合はどうなるだろうか。

ベルグソンは、生成と行動が存在するのであり、ものや状態は、それに対して我々の精神のとる眺めであると主張している。(E. C. 249 : 705) 行動は出来つつあるもので動きそのものである。しかし、行動を出来上ったものとしてみると、ものとか状態とかのように静止したものとして現われることになる。知性は行動をそのように取扱う。だから存在論或いは形而上学の立場から云えば、行動があつて、それから行動を見ると云うことが生じたのである。行動をすることからどうして行動を見ることに移るのだろうか。行動は、特に自由な行動は、自己の人格全体から生じる。しかし、自由な行動は、真の自己とは全く合致すると云うことはない。人間の自由は程度を許す。自由な行動が自己とすっかり合致しないのは、真の根底的自己に対して抵抗するもの即ち表面的自己があるからだと思われる。そして自己において精神性と物質性の二つの相反する動きがある。世界においても同じ事が見られる。「生命は、落下するおもりを持ちあげる努力のようなものである。」(E. C. 247 : 704) このおもりが物質である。そこで世界において生命或いは精神の運動に対して、逆向きの物質の運動がある。そしてそのどちらの運動も単一である。このように生命は物質と対立する。人間の精神の特色をなす知性は、もっぱら物質を取扱うことに適している。これは生命の根源にある「意識が物質のさまざまな習性に適応して、知性となった」(E. C. 268, 270 : 722, 724) からである。こうして知性が発生した。そして知性は「物質に外から働きかけるために生れたものであり、そのために事象の流れ *le flux du réel* に瞬間的切断を加えるが、これは固定され、限りなく分解されることになる。」(E. C. 251 : 707)

知性によって行動を見る立場は成立した。存在論或いは形而上学によって行動する立場から行動を見る立場への移行を説明出来た。同様に存在論の立場から行動を見ることから行動することへの移行が説明出来るのではないか。物質に適應して知性となった意識は、本来の自己から離れて、いわば自分の外に出た。その意識が自分自身の中にかえることによって、生命或いは精神の運動そのものに接することが出来るのではないか。(E.C. 183: 649~50) 意識は一端外に出ることによって、自己自身にかえる、そして直観となる。「知性は精神が物質に向ける注意である。」(P. M. 85: 1319) のに対して、「直観は精神がその対象を物質に固定しながら、更に精神自身に向けている注意をあらわしつゝ。」(P. M. 85: 1319~20) そこでベルグソンは、「私の直観は反省である。」(P. M. 95: 1328) と主張する。こうして知性を媒介として直観が発生したことが解る。知性と直観の発生をもたらす意識の運動は、意識から自己意識への移行として考えられる。別にヘーゲルを持ち出さなくても、我々は誰でも我々自身の内において意識が同時に又自己意識であることに気付いている。ベルグソンは、そう云う意識の構造を考えることをしないで、むしろ意識を実体化し、その運動をとらえようとした。これはベルグソンの形而上学或いは存在論が世界を動きとして見、物質が空間化し外化するのに、生命を自分自身と共感するもの (E. C. 168: 637) として見ているのに基づくのである。先の問題に戻ると、行動すること↓行動することと云う移行は、単に見方の変化と云うことでなく、意識の運動又は意識のあり方に基づいているのである。そしてこの意識の運動の中で、初めて知性の媒介的役割は明らかになる。知性を出発点とする認識論は、こうして存在論或いは形而上学によって基礎づけられなければならないのである。

認識論が存在論によって基礎づけられなければならないと云うことは、知性の働きに関して「知性の発生原因」(E. C. XI: 494) にまで戻って考えなければならぬと云うことである。ベルグソンは認識論に関してすでにそのように考えている。ベルグソンによれば、認識論において選択すべき三つの立場があり、三つだけある即ち精神がも

のに則^{のつと}るのか、逆にものが精神に則^{のつと}るのか、それともものと精神の間に神秘的一致を想定すべきなのか。(E.C. 207: 669) これについて考えてみると、ものと精神の關係と云うことでは、論理的にはこれら三つの立場だけであるように思われる。又哲学史の上では、これらはそれぞれ実在論(經驗論)、觀念論、そしてライプニッツの予定調和説に對應して、他の立場を考えることは困難であるように思われる。しかし、ベルグソンは、これらにつけ加えて第四の場合を考えている。これはカントの考えもなかった事であるが、知性と物質とが次第次第に適應し合つて、やつと共通の形式に落着いたのである。この適應は全く自然に行なわれる、何故なら精神の知性らしきものの物質らしさを同時にうみ出すのは同じ運動の同じ反転なのだから(E.C. 207: 669~70) ベルグソンに対してカントの考えを比べてみよう。カントは先の三つの場合を考えることが出来たはずであるが、実際には最初の二つの立場について考^註えている。カントによれば、精神がものに則るとすれば、精神の働きは單に經驗的なものに過ぎなくなつてしまふ。そして經驗的認識しか可能でなくなる。しかし彼は、数学や物理学においてアприオリで綜合的判断がすでに存在していることを確信している。それでカントは第二の立場をとり、アприオリな認識を可能ならしめる精神の働きを問う。彼は精神(知性)の概念が対象を規定すること、対象一般を考えることの出来るアприオリな觀念(カテゴリー)が存在することを主張する。そして彼は、これが対象一般の認識可能性の論理的条件であることを説明しようとした。つまり知性がこの概念に従つて、感覺的直観に与えられた多様を統一し、それでもつて対象一般を構成することを説明しようとした。これが、この概念の權利要求を明らかにする「先驗的演繹」transzendente Deduktion^註である。これは事実の問題 *quid facti* ではなく、權利の問題 *quid iuris* である。しかしこれに対してベルグソンは、認識の可能性の論理的条件をたずねるのではなく、知性のもつ概念や枠がいかにして成立したかと云うこと即ち知性的の認識の發生原因を問うのである。ベルグソンは經驗論者として語っている。しかし單なる經驗論でなく、形而上学を前提としている。彼は認識論においても行動することから行動を見ることへの移り行きの中で知性の働きを

見きわめようとしている。ベルグソンにとっては、常に事実のつながりがかんじんであった。知性のアプリオリな働きは彼において問題とならない。だから知性と物質の相互作用によってやっと共通形式が生れたと云うことは、これが変えられないと云うことを意味しない。知性と物質の相互作用の行なわれている具体的経験の中で、共通形式即ち知性の習性や概念を改造することの可能性は残されている。さて知性の作り上げた枠や習性にはいくつかの問題がある。

知性は行動の必要のために「製作」するものである。製作とは、先に述べたように物事を好きなように要素に分解し、組立てることである。知性が運動をとらえようとする際、それに対して働きかけるために、空間の中で通過する点をとって固定し、それらでもって運動を再構成しようとする。しかし空間の中で不動の点をいくら多く集めて、運動を精密に規定しようとしても、これは実際に科学が行なっている所であるが、動きそのものをつかむことは出来ない。この操作を時間の中で考えると、これは、生じた運動を要素に分解し、過去にさかのぼって、それから要素の組合せによって現在の運動を再現しようとすることである。ここに時間の逆行がみられる。更に製作と云う知性の習慣から、無や無秩序といった偽の観念が生じる。現に存在するものが、要素の組合せによって或いは手を加えられて生じたと考えるところから、存在の基礎に無を、秩序の底に無秩序をおくことになる。しかし無や無秩序の観念を分析すると、存在や秩序の観念よりも多くのものが含まれているのが解る。これらの観念は、人が求めている存在と秩序に対するあてはずれを意味するからである。又現実の底に可能性を考える場合も同じである。そこには時間の逆行がみられる。このように知性がふるまうことを、ベルグソンは、「回顧の論理」*logique de rétrospection* と呼ぶ。「この論理は、現在の事象を、可能或いは潜在の状態において過去に投げこまないわけにはいかない。」(P. M. 19 : 1267) だから製作は、ものごとを回顧的に見ることを前提にしている。これが知性にとって自然的な働きである。(E. C. 238 : 696) このように知性をその習性のままにしておく、我々は動きそのものをとらえることが出来ず、偽

の観念を用いて考えることになる。

このような知性の習性を認めて、絶対化した代表的思想家として、ベルグソンはカントをとり上げ、カントの知性論、認識論を批判している。カントは、知性の製作的傾向をそのまま認めて、知性がその概念に従って、直観の与えた多様を統一し、対象（自然）を構成することを主張する。これはまさに無秩序から秩序を作り出すことである。カントの思想はこの知性に自然的なまちがいを組織的に、そしてその全ての帰結に至るまで展開したものである。（P. M. 69 : 1307）更にカントは、知性と知性の概念（カテゴリー）の発生をたどることをしないで、知性とその枠をそのまま、すっかり出来上ったものとして受け入れようとした。（E. C. 358 : 798）又カントは、先験的演繹を通じて全ての経験をこの知性のカテゴリーの中に入れようとしている。このことをベルグソンは「プラトンの考えることと」platoniserと呼び、カントの「純粹理性批判」は、我々は「プラトンのに考えること」以外は不可能であるという要請に基づいていると述べている。（P. M. 223 : 1429）このようにカントは、知性の働きを固定し我々の全ての認識が知性に依存していると考えようとした。

これに対して、ベルグソンは、むしろ知性にとって自然的な傾向に反対する。「プラトンのに考えること」をやめて、経験の中で発生的に考えなければならない。そして彼は「知性の放任によって生じたことは、知性の努力によって破ることが出来るはずである。」（P. M. 75 ~ 76 : 1312）と主張する。つまり知性は、自分が作り上げた固定した一般的な概念や図式でもって考えることを止めて、ものと精神の相互作用の行なわれている所に戻って即ち具体的経験の中で考えなければならない。「哲学はまず出来上った概念を追出し、経験に訴える。」（P. M. 46 : 1288）知性は常に概念を用いて考えるから、対象に即した観念を作り上げ、常に経験に学ぶようにしなければならない。「知性がこれから行なわれる行動とそれに続くはずの反作用とを目ざし、対象をさぐりながら、それから流動する印象をいっつもうけとろうとかまえていると、それは絶対の何かにふれた知性である。」（E. C. VII : 491）更に「哲学は、新し

い問題に対して新しい努力を必要とする。」(P. M. 27 : 1272) こうして、経験の中で知性の機能を改善し、拡大してゆく努力が必要である。知性は製作する、即ち知性は行動を見る立場にたつ。しかし今まで述べてきたように行動する立場にもどるように努力が必要である。こうして行動することと行動を見ることを出来る限り、密着させていくと云うことをベルグソンは要求した。これがベルグソンの知性論の中心問題であり、又彼の哲学の核心である。

註 1 Rose-Marie Mossé Bastide, Bergson et Plotin p 30, 397.

2 ベルグソンの著作の標準的版として Bergson Oeuvres édition du centenaire textes annués par André Robinet 1959. を用いた。しかし一般にはベルグソンの個々の著作の頁付けが用いられているので、以上のような略号で著作を示し、その頁を記し、コロンを打ってその後には百年記念版の頁を記した。

D. I. : Essai sur les Données Immédiates de la Conscience

M. M. : Matière et Mémoire

E. C. : L'Évolution Créatrice

E. S. L'Énergie Spirituelle

P. M. : La Pensée et le Mouvant

3 イマージュは一般には、像を意味する。ベルグソンは、物と表象の両方の意味をこれにもたせているので「物象」と訳される場合(今井仙一・ベルグソン・創元文庫五一頁)もある。ベルグソンはイマージュを現実の世界で見出されるものに限らず、記憶において見出されると考えている。そうするとイマージュはもっぱら表象として考えられている。イマージュについて適当な訳語を見出すことが出来ないのも、原語のままで用いることにする。

4 Henri Gouhier : Bergson et le Christ des Évangiles p. 66 においてこの指摘が見られる。

5 Immanuel Kant : Kritik der reinen Vernunft, B 124-5

6 同 書

B 117

The Functions of Intelligence in Bergson's Philosophy

Résumé

Bergson asks what is the true ego. Intelligence which represents the human spirit is the guide rope to the question. It works on the matter, fabricating the inorganic tools, the space, and the concepts. Through these activities of it is liberated the consciousness which has slept in insuinct, The consciousness, once liberated, returns to itself, and intuition comes out. In the theory of knowledge intelligence is a medium to it.

Under the surface-ego we can contact with the inner fundamental ego by means of intuition. In our true ego we find the pure duration and the life itself. Life which develops all creatures, is a movement; matter is a movement of the opposite direction. Consciousness which underlies life, tries to adapt itself to matter, and exteriorizes itself, then returns to itself. This movement explains the genesis of intelligence and intuition in which experience is brought about. We should not regard the functions of intelligence as fixed.

Intelligence which fabricates, misses the movement and holds false ideas, such as nothingness or disorder. Criticizing the habit of intelligence in these points, he confronts with Kantian view of intelligence.